

『ヴェニスの商人』—逆転の喜劇

金城盛紀

多様な解釈がなされるシェイクスピアの作品のなかでも、『ヴェニスの商人』ほど人気があってしかも真っ向から対立する見解を長期にわたって可能にする喜劇は、ほかにないのではなかろうか。多様各種の主張が交差し、あるいはかみ合わないまま論議が続くが、論議の最大の対立点はつまるところ、高利貸しのユダヤ人シャイロックは冷血な悪党か、それとも不当に虐げられた悲劇的人物か、この点に収斂する。¹

ノーマン・ラブキンは相反する反応を可能にするこの作品について次のように述べている—『ヴェニスの商人』の複雑性は「アンビヴァレントな記号がこの作品には組み込まれている」がゆえのものであり、その記号は「人生の解決不可能な問題の感覚」であり、この作品の意味は「究極的に何とも言いようがない」ものである。『ヴェニスの商人』の複雑性は結局のところ「人間存在の複雑性」の表れである、というのである。²

綿密な読みに基づいて犀利かつ的確な批評を下すラブキンにたてつくつもりはないが、このすぐれた学者批評家の『ヴェニスの商人』論は、あまりにも今日的視点にとらわれているのではないかと思われる。もちろん、あらためて言うまでもないが、ホーローコストを体験した20世紀の人間にとって、人種差別の不当性・不法性はいくら強調しても強調しすぎるものではない。シャイロックの血の叫びはたんなる絵空事の演劇、フィクションである舞台上の訴えとして聞くのはむずかしい。過去の記憶だけでなく、後遺症を引きずりながら見せつけられる差別の現実は、現在でもあまりにも生々しいのだ。改宗の強制という信教の自由にかかわる難問もある。

しかし、歴史的に蓄積され、払拭するのがけっして容易ではない業のような恐ろしい差別感情がしぶとく存在している事実を認めた上、「積極的な不信の停止 (Willing suspension of disbelief)」にいまいちど思いを致して、『ヴェニスの商人』を読む試みはあまりにもアナクロニスティックな徒勞であろうか。今や古くなつたけれども、「新批評」が指摘した作者の意図を読むことの誤り、「意図の誤謬」という問題にも留意しながら、この作品を喜劇として読むことは可能なのであろうか。

1

『ヴェニスの商人』が三つの筋、すなわち、箱選び、裁判、指輪のプロットが連関し展開する構造になっていることは、ほぼ共通の認識になっているように思われる。小論は、この三つの筋を検討し、三つのプロットそれぞれが織りなす作品全体の総体が、逆転のパターンによって構成されていることに注目したい。『ヴェニスの商人』をこのように読むことは、シャイロックの立場を理解する障害になるとは思われないが、彼を悲劇的犠牲者とする解釈とはどうしても両立しがたい。

箱選びの筋を検討する前に、作品の冒頭に目を向けておきたい。

In sooth, I know not why I am so sad,
It wearies me, you say it wearies you;
By how I caught it, found it, or came by it,
What stuff 'tis made of, whereof it is born,
I am to learn: (1.1.1-5)³

アントニオは原因不明の憂鬱感におそわれている。この裕福な貿易商人の憂鬱は、まもなく明らかにされるように、親友のバッサニオに意中の女性ができ、彼との友情に大きな変化がおこるのではないかと恐れて生じている。さらに、この気分の落込みは、アントニオの人間的未熟さを示唆するもので

あるとも考えられる。このことを指摘したローレンス・ダンソンは「道徳的不全の情緒的反応」であると述べている。⁴ シャイロックを邪険冷酷に遇するアントニオは、ユダヤの高利貸しに対するこのような行為の結果として、良心の呵責が生じて、情緒がやや不安定になっているわけである。自覚の有無はともかく、気持ちの負担を感じているのであろうから、アントニオが本来的には邪悪な人間ではなく、その行状に問題があっても、彼には改善の可能性があることを意味する。ルネサンスの富める貿易商人も、ふつう一般の人間のいたらなさや悩みを共有している。西洋人が何世紀にもわたって抱いてきた深くかつ広範囲に及び、宗教のお墨付きもある、ユダヤ人でしかも高利貸しに対する社会的反感が、アントニオの憂鬱感の背後には存在する。

友人の憂鬱感の原因を詮索してサレーリオもソレイニオも異口同音にアントニオの外国貿易が心配の種ではないかと、心配になった気持ちを何気なく装って、慰めるかのように口にする。

Your mind is tossing on the ocean. (1.1.7)

Believe me sir, had I such venture forth,
The better part of my affections would
Be with my hopes abroad. (1.1.15-17)

And in a word, but even now worth this,
And now worth nothing? (1.1.35-36)

アントニオは、投資が船一艘やひとつの場所にかかっているのではないから、貿易事業のことでふさいでいるのではないと打ち消す。しかし、船板一枚下は地獄、持ち船がすべて難破したとの知らせが現実にもたらされて、友人バッサニオに用立てるためにシャイロックから借りた大金が弁済不能となる。万全を期しても、起こるはずのないと思われる災難が起こるのが人生で

ある。程度の差はあれ、危険や惨事に見舞われる不運は人生に珍しいことではない。アントニオは世間一般の偏見・差別感情を共有し、心にやましいものを抱きながらも、親友を助けようとして、不運にも苦境に追い込まれる、基本的には私たちとそんなに変わらない人間として登場しているといえよう。

ヒロインのポーシアには名裁判官ダニエル様の再来、華麗で聡明有能な女性というイメージがほぼ定着している。しかし、ヒロインも、バッサニオによる賛辞で紹介されるが、颯爽とその姿を観客に披露するのではない。巨万の遺産を相続している才色兼備の女性だが、気が滅入っている。ベルモントと名づけられたおとぎの国のような所に住んでいるお姫様も、この点では富豪のアントニオと同様である —“By my troth Nerissa, my little body is aweary of this great world.”(1.2.1-2)。

なんの不自由も悩みもなさそうな女性にも悩みはある。若くて美しいお金持ちには求婚者が世界中から押し寄せるが、結婚の相手は亡くなった父親が残した指示に従って決めなければならない。

I may neither choose who I would, or refuse who I dislike,
so is the will of a living daughter curb'd by the will of a
dead father. (1.2.22-25)

ベニスの商人もベルモントの令嬢も鬱々としている点で共通するのである。

2

「死んだ父親の遺志」とは、ポーシアの求婚者は三つの小箱のなかから一つを選ぶことによってしぼられるという内容の、ポーシアの亡父が遺言で命じた条件のことである。しかし、ポーシアは、父親の厳格な命令に忠実に従うことによって、愛するバッサニオとの結婚が実現し、その結果、借金を期限どおりに返済することが不可能になって命を狙われる破目になるアントニオの助命解放も可能とする。つまり、拘束する遺志に忠実に従うことが、願

望充足を可能にするのである。厳しい現実には、幸いなる達成の契機となるのである。⁵

生きている娘の意思は、死んだ父親の遺志を生かすという前提の上で、尊重される運びとなる。しかし、このめでたき結果は、たんなる偶然による幸運なのではない。ポーシアが「籤で運命が決められるはずのこの私」と言えば、求婚者のひとりモロッコ王も「さいころででも決める」云々と口にするが、実際には、それぞれの求婚者が箱を選ぶにはそれなりの理由があり、それは当事者の性格、生き方を示唆するものである。三つの小箱に対応して、箱を選ぶ三人の求婚者は、三様である。

肌の色の黒いモロッコ王は「世上衆人の望むもの」と銘が刻まれた金の小箱を選ぶ。アロガントなアラゴン王は「その身相応のもの」と銘打たれた銀の小箱を選ぶ。双方ともに発想の原点は自己にあり、ポーシアを愛しているわけではない。ポーシアお気に入りのバッサニオは（二人は相思相愛の仲だったのだ）、「その持てる一切をあげて賭けざるべからず」と記された、外見は見劣りのする鉛の箱を選ぶ。外見は卑しい鉛の箱にポーシアの絵姿が隠されている。

外観や自己愛によって選ぶのではなく、持てる一切を投げ出す覚悟を胸にして選択に臨むのがバッサニオである。いや、このしまりのない男には投げ出すものは借金以外なにもない、と皮肉な目で冷ややかに見る向きもあるかもしれないが、欠点があっても好きになった男女が結ばれるこのめでたきに免じて、ここは片目をつぶっておきたい。ポーシアの高揚した喜びの声が冷笑の衝動を抑えるてもくれる—「ただあなた故に、今の二十倍、さらにはその三倍もの立派な女、一千倍も美しい、そしてまた一万倍もの金持になりたいものでございます」。そのポーシア自身も、「その持てる一切をあげて賭けている」のだ。バッサニオにはポーシアの富を必要とする苦境にある事実も否定できないが、この男を突き動かす原動力はロマンティック・ラブである。令嬢の財産は彼女の資質をいっそう高め輝かす付加価値である。

すべてをあなたのために、という思いで二人は一致している。バッサニオ

の捨て身の愛情は、金の箱を選んだモロッコ王と銀を選んだアラゴン王の姿勢と対照的だが、アントニオの献身的な友情とは相通ずるものがある。シェイクスピアの喜劇における幸福な成り行きには、偶然を超える、観客・読者の願望をかなえ充足させる、喜劇的エートスというものが脈打つ。

バッサニオが求婚に成功できるのはアントニオの友情のおかげである。彼の献身的な愛情を实らせるには友情の献身的な支えがあった。その支えはシャイロックに人肉1ポンドを合法的に要求できる結果をもたらす。しかし、この悲劇的な事態はバッサニオの妻となったポーシアの檣舞台を設定することになる。箱選びと人肉裁判は相互に関連する。

3

シャイロックを原告とする裁判は、借用証に明記されているように、約束どおりの期限までに3000ダカットの借金返済ができないアントニオの肉一ポンドを、心臓にもっとも近い所から切り取る、という訴えにかかわるものである。この裁判は『ヴェニスの商人』のクライマックスとなるだけでなく、逆転劇そのものとなる。

融資を申し込んで、シャイロックに「ほんの冗談」「酔狂な証文」と軽く言われた条件であるが、このような条件を示されてバッサニオは一抹の危惧の念を抱いて遠慮したいと言う。しかし、その声には耳を貸さないアントニオは、危険の可能性をまったく考えることなく、この時点ではおそらくシャイロック当人も明確に意図しているのでもない、罠にかかってしまっている。もっとも、友人のためとはいえ、借金を申し込むアントニオの姿勢は終始傲岸で、挑発的であるのも事実である。

I am as like to call thee so again,
To spet on thee again, to spurn thee too.
If thou will lend this money, lend it not
As to thy friends,....

『ヴェニスの商人』—逆転の喜劇

But lend it rather to thine enemy,
Who if he break, thou may'st with better face
Exact the penalty. (1.3.125-32)

アントニオはシャイロックに対して非道な仕打ちを行い、商売の邪魔までしてきたが、シャイロックの鬱積した積年の恨みを晴らす機会を提供することになる。⁶

シャイロックに命を狙われるアントニオにキリスト像を見出す見解もある。⁷ 裕福なキリスト教徒の商人がユダヤ人の高利貸に対してことあるたびに冷酷な仕打ちを行い、露骨な差別感情を見せつける。それが忘れられない者には、キリスト像をそのような不遜なアントニオに重ねるのは、むしろキリスト像をいやしめるものになるのではないかと、と私には思われる。しかし、アントニオがいかにシャイロックを冷酷に遇したとしても、そして、たとえ証文に明記された契約の履行という「合法的」外観を装っていても、違約の償いとしてアントニオの心臓付近から1ポンドを切り取るという行為は殺人に相違なく、とうてい容認できることではない。シャイロックの癒しがたい怨念・憎悪は理解できても、「憎けりゃ殺す、それが人間ってもんじゃないのかね？」(4.1.67) というわけにはいかないのである。たしかに、シャイロックには言葉の本来の意味で理解し、同情してしかるべき面がある。

Hath not a Jew eyes? Hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions? fed with the same food, hurt with the same weapons, subject to the same diseases, healed by the same means, warmed and cooled by the same winter and summer as a Christian is?—if you prick us do we not bleed? The villainy you teach me I will execute, and it shall go hard but I will better the instruction. (3.1.52-66)

シャイロックの訴えは胸を打つ。しかし、だからといって彼が人を殺そうとする事実が変わりはない。差別され痛みつけられたシャイロックに対して観客・読者が自然に抱く同情の念も、彼の剥き出しの殺意が相殺しかねない。⁸もちろん、シャイロックを悲劇的人物とする解釈がひとつの大きな流れである事実は否定しがたい。⁹しかしながら、きびしい批判の目が高利貸しを足蹴にするキリスト教徒に向けられても、そして、形式的にはたとえ合法性といううわべを装っていても、露骨な殺意が彼を容認しがたい悪党にして、スケープゴートの役割を演じさせる。シャイロックは『空騒ぎ』のドン・ジョン、『お気に召すまま』の公爵とオリヴァーにつながる人物である。彼は喜劇の悪党なのだ。

裁判において、シャイロックは証文に記載されているとおり、ヴェニス法律の文面どおりということを経験して一步も譲らない。証文の文字どおり、法規の規定どおりの実行を強要する執念は、耐えがたきを耐えてきた長年の痛みと屈辱感が生んだものであろう。罵詈雑言に耐え、唾をかけられ足蹴にされてもひたすら耐えてきたのだ。

一字一句の厳格性を訴える高利貸しの徹底性は、恨みを晴らしたい怨念の徹底性に通じるものであろう。しかし、シャイロックのこの徹底性は徹底的な逆転を可能にする。

男に変装して法学博士としてポーシアは裁判に臨む。奇怪な訴訟であっても法的手続きの妥当性を認めた上で、ポーシアはシャイロックの慈悲に訴える。

And earthly power doth then show likest God's
 When mercy seasons justice: therefore Jew,
 Though justice be thy plea, consider this,
 That in the course of justice, none of us
 Should see salvation: we do pray for mercy,
 And that same prayer, doth teach us all to render

The deeds of mercy. (4.1.192-98)

「われらに犯した罪をわれらが許すごとく、われらの罪をも許したまえ」—「マタイによる福音書」第6章にある主の祈りである。ポーシアの訴えはキリスト教徒の心に訴えるものでもあるとドーヴァー・ウィルソンは述べる。¹⁰ ポーシアが説く慈悲は、キリスト教徒、つまり昔グローブ座で『ヴェニスの商人』を観たほとんどの観客が、日曜日ごとに教会で斉唱し、その多くが日夜唱えた祈りの文句であることは、思い出してもよい。こんにちでも、イギリスの教会礼拝に参列すれば、「慈悲」の一語はきま^{マシ}ってくり返し耳に入る。うつせみの生身の人間、「老い朽ちる塵泥の肉に包まれて」はじめて存在が許される人間は、キリスト教徒であろうとなかろうと、また魂の問題であろうと、日常の些事であろうと、許し許されるのでなければ平穩には生きていけない。恨みつらみの塊になっているシャイロックには、彼が一步も譲ることのできない justice (法律と正義は同一語である) も、人間にとって慈悲なくしては過酷な裁きにしかならない現実がわからない。この作品のどんでん返しが、まさに人間存在の基本とかかわる問題を軸になされるのは興味ぶかい。

しかし、ポーシアがいかに情理を尽くして慈悲の精神を説いても、かたくなに閉ざされたシャイロックの心を開くことはできない。ポーシアの雄弁な説得はシャイロックが頑として主張し、ヴェニスの法廷が容認せざるを得ない証文の文面の絶対性を強めるに終わる。傷口の手当てをするために外科医の手配を求めても、証文に記載なしの理由で一蹴される。それでも裁判は国法を遵守して行わなければならない— “A pound of that same merchant’s flesh is thine,/The court awards it, and the law doth give it.” (4.1.295-96)。

明快な判定を得て、シャイロックがアントニオの肉1ポンドを胸より切り取ろうとするその瞬間に、ポーシアの待ったがかかる。

Tarry a little, there is something else,—
This bond doth give thee here no jot of blood,
The words expressly are “a pound of flesh”:
Take then thy bond, take thou thy pound of flesh,
But in the cutting it, if thou dost shed
One drop of Christian blood, thy lands and goods
Are (by the laws of Venice) confiscate
Unto the state of Venice. (4.1.301-308)

ハムレットの言葉を借りればまさに“Hoist with his own petar”である。はからずも証文の文面がアントニオを合法的に殺害することを可能にする決め手になって、シャイロックがナイフを振り上げるその瞬間に、あにはからんやその証文は被告救済の切り札となり、原告を殺人未遂の被告へと逆転させる。悲劇的窮状をもたらした原因そのこと自体が、一転、喜劇的解決を可能にするのである。禍は福をもたらす。¹¹

どんでん返しは言葉じりを捉えた三百代言的反論によってなされるのではない。シャイロックの仮借ない徹底した証文の絶対性主張、厳格な法律主義が逆転への引き金となる。思いもかけずに宿敵アントニオがはまった罠と見えた証文が、シャイロック自身の罠となり、墓穴となるのである。この打開策をポーシアに教えたのがシャイロックの証文主義、法律主義である。逆転のキーを提供するのはほかならぬ原告なのである。

アントニオも生命の危機にさらされて、ポーシアの訴えに素直に答えていると思われる。シャイロックに対して露骨に冷酷な仕打ちをくり返していた貿易商人が、あくまで当時のキリスト教の立場からではあるが、自分の命を狙い、完敗した原告に対して、復讐ではなく寛大な処置を公爵に要請する。対照的におごり高ぶるグレシアーノの言動は生命の危機に瀕して学んだアントニオの慈悲を強調する。¹² 苦境から解放されたアントニオには、遭難したと伝えられていた貿易船三艘が無事に積荷を満載して入港したとの知らせも、

のちに入る。アントニオは物心両面の逆転で報いられることになる。

4

裁判を終えたポーシアは、逆転勝訴の報酬として提供された3000ダカットを受け取らない。それでは代わりになにか記念の品をと懇願されて、バッサニオの指にはめられた指輪を所望する。その指輪はポーシアからもらうときに、「絶対に売らぬ、やらぬ、失くさぬ」と誓った、いわば、口頭ながら証文を入れて身につけている大事な品である。シャイロックにも独身のときに、妻となるリアからもらったトルコ石の指輪があった。その記念の指輪を娘のジェシカが駆け落ちをして、猿一匹と換えたという知らせを受けた父親の悲哀も記憶に新しい。当然のことながら、バッサニオは、代わりにヴェニスでもっとも高価な指輪を贈りたいと申し出るが断られ、妻への約束と恩義に報いるジレンマは、その場では約束を破って指輪を手放すことによって回避する。

ポーシアがシャイロックのように徹底した証文主義にこだわり、約束は約束として、文字どおり忠実に履行することを主張する立場に徹するならば、理由はどうであれ、バッサニオは妻を裏切ったことになる。

果せるかな、ベルモントの館に帰ったバッサニオはポーシアに散々やり込められる。「親友の、現に生命の親であるその恩人」にどうしても断れなかったという釈明は通じない。約束違反は約束違反。他人に「やらぬ」という誓言を破っていることは、アントニオの証文不履行と同様に明白である。シャイロックが振りかざした証文のように罰則規定があるわけではないが、ポーシアは違約の代償として、指輪をもらった博士との浮気をしかねないと脅す。しかし、もちろん観客・読者はその指輪をもらった親友の恩人である博士が当のポーシアであることは先刻承知している。たとえ、報復の浮気を実行に移したとしても、それは浮気にはならない。指輪をめぐる攻防は、人間ひとりの命がかかった裁判が、悪党撃退の上首尾で喜劇的に終わったあとの、祝祭気分を盛りあげるエピソードなのである。

指輪をめぐる攻防と結末は、箱選び、裁判のプロットと同様に逆転の構造となっている。脅かすような銘が記されたみすぼらしい箱に祝福が秘され、亡父が遺した束縛が解放・歓喜をもたらした。シャイロックの執拗な法律主義が、アントニオの逆転勝利を可能にして、悪意のある復讐者をくじいた。同様に、バッサニオの皮相的には裏切り行為となる指輪を手放すことは、彼を深く悩まし、さらに新妻に散々脅されるはめになるが、結局は、格調高いお説教をたれたポーシアの茶目っ気ぶりの披露となる。指輪は再び彼の指に戻って、万事うまく運んでまるく収まった二人の仲の円満ぶりを示すことになる。悲劇的ジレンマにもなりかねない友情・義理と愛情の衝突は、喜劇のプロットに見事に吸収されて、友情と愛情の両立を証する。

指輪は形状そのものが象徴的である。指輪の円形は鎖の名残りから結婚の^{ボンド}拘束を表すが、拘束は^{ボンド}絆ともなる。また、円形は伝統的に円満調和の象徴である。アントニオの救命がポーシアの尽力によりものであり、妻との約束を破ることになってもあえてなされる、アントニオの恩人に対して礼を尽くすバッサニオの行為は、夫婦愛と友情が両立し、相互的に強化するものであることをも示唆しているように思われる。^{ボンド}証文によるアントニオの命を脅かす^{ボンド}束縛は、それ自体がバッサニオとの友情の^{ボンド}絆の証であるが、その証文によってバッサニオの求婚は成功する。さらにその証文は、裁判において破棄されるのではなく、シャイロックが想像できる以上に厳密に適用され、その結果、夫婦の^{ボンド}絆と友情の絆を再構築し、強化することになる。指輪はそのイメージである。¹³

円満調和の賛歌は月明かりのもと、駆け落ちしてきたジェシカと恋を語るロレンゾによってうたわれる。

Here will we sit, and let the sounds of music
Creep in our ears—soft stillness and the night
Become the touches of sweet harmony:
Sit Jessica,—look how the floor of heaven

Is thick inlaid with patens of bright gold,
There's not the smallest orb which thou behold'st
But in his motion like an angel sings,
Still quiring to the young-ey'd cherubins;
Such harmony is in immortal souls,
But whilst this muddy vesture of decay
Doth grossly close it in, we cannot hear it: (5.1.55-65)

夜空に輝く満天の星は、天界の美しい秩序そのものであり、その目に映る存在の美しさは聴覚的には、天球の運行によって奏でられる妙なる調べとなる。その調べは現身の肉体の耳では聞こえないだけだ。しかし、地上の楽師たちが奏でる音楽は塵泥の肉に包まれている人間に聞こえ、それは天上の調べと呼応する。あるいは、それを請い求める祈りとなる。この宇宙的円満調和の具体的象徴こそ、愛の指輪なのである。

シェイクスピアの時代、近代科学の胎動が始まり、古代ギリシア以来連綿と受け継がれてきた伝統的秩序観にはすでに疑義がはさまれ、挑戦が始まっていた。しかし、プトレマイオスがまとめあげた地球中心の秩序ある円満な宇宙像は破壊されていたわけではなかった。愛の調和は万物の調和のイメージとなるものである。¹⁴

5

冒頭、私がかび臭くなった「積極的な不信の停止」までもあえて持ち出して、『ヴェニスの商人』を喜劇として読み直す可能性を示唆したが、ここまできて、やはりシャイロックの扱いに違和感が残ることを告白せざるを得ない。天動説が地動説にとって代わって天地がひっくり返っても、私たちはかつてジョン・ダンが動揺し嘆いた震天動地の衝撃を受けることはない。もはや、ダンと同じように “'Tis all in pieces, all coherence gone” (*An Anatomy of the World*, 1.213) とはだれも思わない。コペルニクスがもた

らした現実認識の大変動は歴史的過去の出来事となって久しく、こんにち、何人をも悩まし傷をつけることはない。しかし、差別の問題、信教の自由はあまりにも現実的な課題であり、生々しい。

証文、法律の不可侵性を盾にしてアントニオの命を狙ったシャイロックが、その論理によって返り討ちされる逆転劇は、喝采に値しよう。ただ、敗れたユダヤ人に対して示される慈悲ある処置とされるキリスト教へのうむを言わせぬ強制的改宗が、逆転劇の喜劇的祝祭気分に入る気持ちの邪魔になる事実は否定しようもない。たとえ強制的な改宗であっても、改宗は救済であると劇中のキリスト教徒が信じたにしても、独善的傲慢の臭気は消しがたい。グロスが言うように、シャイロックにとって、強制された「洗礼は一種の精神的殺人」にほかならない。¹⁵ グレシアーノの敗者いじめもグローブ座の平土間を占めるグランドリングたちを喜ばしたかもしれないが、邪魔を増大する。

シャイロックが科される改宗は無慈悲な外面的・形式的なものであって、真の改宗にはならない。それでも、エリザベス朝の観客にはなんの抵抗感や違和感もなく容認されたであろうことは想像できないわけではない。しかし、昔の観客と同調するには時代の隔たりがあまりにも大きすぎる。シャイロックをユダヤ民族と切り離して一個人のスケープゴートにするには、『ヴェニスの商人』では、ユダヤ人高利貸とユダヤ民族の同一化が強く、また歴史的にユダヤ民族が受けた迫害があまりにも大きすぎるのである。

注

1. ジョン・グロスは、シャイロックをその起源からポスト・ホーローコストに至るまでを歴史的に検討するが、解釈の中心となるのは彼が悪党か犠牲者かということである。John Gross, *Shylock: A Legend and Its Legacy* (New York: Simon and Schuster, 1992): 富山太佳夫・越智博美訳『ユダヤの商人シャイロック』(青土社, 1998).
2. Norman Rabkin, *Shakespeare and the Problem of Meaning* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1981), pp.28-39.
3. The Arden Shakespeare *The Merchant of Venice*, ed. John Russell Brown (London: Methuen, 1971). 訳文は中野好夫訳『ヴェニスの商人』(岩波文庫,

1979) より。

4. Lawrence Danson, *The Harmonies of "The Merchant of Venice"* (New Haven and New York: Yale University Press, 1978), p.32.
5. Sigurd Burckhardt, *Shakespearean Meanings* (Princeton: Princeton University Press, 1968), p.210.
6. 恨みつらみが秘められた復讐心を明らかにする次のようなシャイロックの独白は、彼に好意的な演出ではしばしばカットされるようだ。“Introduction” *The Merchant of Venice*, ed. Jay L. Halio (Oxford: Oxford University Press, 1994), pp.39-40.
“I hate him for he is a Christian:
But more, for that in low simplicity
He lends out money gratis, and brings down
The rate of usance here with us in Venice.
If I can catch him once upon the hip,
I will feed fat the ancient grudge I bear him” (1.3.37-42)
7. Gary Grund, “The Fortunate Fall and Shakespeare’s *The Merchant of Venice*,” *Studia Neophilologia* 55(1983), pp.153-65. しかし、グラントが論ずる *felix culpa* の観念は逆転の観念そのものである。
8. F.P. Wilson, *Shakespearian and Other Studies*, ed. Helen Gardner (Oxford: Clarendon Press, 1969), p.85.
9. William Hazlitt, *The Round Table; Characters of Shakespeare’s Plays* (1817, London: Dent, 1957), pp.320-24. ハズリットに賞賛されたエドモンド・キーンに始まるロマン派的解釈はヘンリー・アーヴィングに継承され、悲劇的犠牲者としてのシャイロック像が成立した。Gross, pp.125-64.
10. John Dover Wilson, *Shakespeare’s Happy Comedies* (London: Faber and Faber, 1962), p.114.
11. Grund, p.158.
12. John Ozark Holmer, “*The Merchant of Venice*”: *Choice, Hazard and Consequence* (London: Macmillan, 1995), p.215.
13. Burckhardt, p.210.
14. ダンソンはグレシアノもシャイロックもこの調和の世界に入れている。
15. Gross, p.105.

The Merchant of Venice
as A Comedy of Reversals

Seiki KINJO

This is an attempt to read *The Merchant of Venice* as a comedy of reversals. In each of the three plots—the casket, the trial, and the ring—there are reversals which are interrelated, and their culmination forms the governing pattern of the play.

The apparent impediments of paternalistic imposition and the meager appearance of the lead casket with a threatening inscription lead to the successful marriage of the true minds. The most critical and climactic reversal in the play takes place in the trial scene. The heinous murder, attempted by Shylock in revenge, is frustrated by the very means he meticulously adhered to—a demand to follow the letter of the law. The accuser and the accused change their positions. Shylock is now accused of attempted murder but is treated with the spirit of mercy. Antonio also, now liberated, learns the virtue of mercy as eloquently appealed to by Portia. The tormenting difficulties of the dilemma Bassanio faces between the obligation of friendship and marital love results in the happy fulfillment of both friendship and love in a comic resolution, thus allowing the glimpse of the vision of a ring of harmony to “muddy vesture of clay.”

The stumbling block to this reading seems to be the treatment of Shylock after the tables are turned upon him. Even with a determined “willing suspension of disbelief” on the one hand, and on the other,

『ヴェニス商人』—逆転の喜劇

being aware of the pitfall of “intentional fallacy,” I nevertheless feel very uneasy about the shotgun conversion. Now that we have experienced the holocaust and the inviolability of conscience is undeniably established, it becomes more difficult to accept this conversion.